

60315

教科書文庫

6.
810
34-1950
01304 49759

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

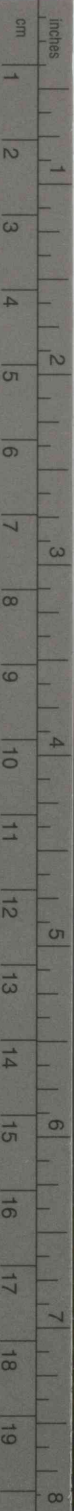


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省検定済教科書

2	小国415
東書	



71A7
1L0
2

新しい国語

柳田国男編

四年上



中央図書館

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449759

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

新しい国語

四年上



東京書籍株式会社

広島大学図書
0130449759

広島大学図書
0130449759



もくろく

一 春 四

(一) 春は花になって

(二) 春のおとずれ

二 明かるい学校 二十四

(一) 先生のおみやげ

(二) こういう友だちがいる

三 楽しい家庭 四十八

(一) 母の日

(二) しゃんちょう

四 自然とともに 六十七

(一) 川原遊び

(二) 山の少年のたより



五 時計 七十八

(一) 古い時計

(二) いろいろな時計

六 注意して見よう 九十一

(一) かわったじゃがいも

(二) 漢字の話

七 夏の生活 百三

(一) 林間学校

(二) 進さんの日記

八 むかし話 百二十五

(一) きっちょむさん

(二) 一本のわら

ふろく 新しく出た漢字 百四十五
勉強の手引 百四十六



一 春

(一) 春は花になって

春は花になってやって来る。
れんげになつたり
たんぽぽになつたり
野山を明かるく色どりながら
ちようちよをさそつて
やって来る。

春はいつもにこにこ顔だ。

春は小鳥になつてやって来る。
ひばりになつたり
こま鳥になつたり
かわいい声で歌を歌いながら
そよ風に送られて
やって来る。
春はいつも陽気な歌い手だ。



(二) 春のおとずれ

まくがあく前に村の子供一がまくの外に出て来る。

子供一「きょうもぼくは森の中に行ってみました。だがやっぱりまだ森の中は冬のとおりでした。木という木ははだか、根元にはまだ雪が残っていました。見わたす限り、どのえだもどのえだも、みんな、はい色をして芽を出すようすありません。鳥の飛ぶのも見えなければ、流れの水の歌うのも聞えません。その時、どこからともなく、かすかな音が聞えてきました。それは、春の来るのを待ちかねている南風のため息でした。そ

れにしても、春のめがみさまは、ぼくたちのことを、おわすれになっっているのでしょうか。」

子供一帰る。

一の場面

森の中。あれはたさびしい冬、まる木小屋がある。

だれもない。春のめがみが走って出て来る。

めがみ「わたしは帰って来た。ようやくのことまで帰って来た。みんなが待っているだろうと思うと、わたしは気が気でなかった。(あたりを見まわして) おや、どうしてこんなにさびしいのだろう。みんなはどこにい

るのだらう。」

春のめがみは小さなふ
えをふく。それに答え
るように鳥が鳴き、う
さぎが出て来る。

うさぎ「お帰りなさい。春のめ
がみさま。」

めがみ(なつかしそうに)「あら、

うさぎさん。」

うさぎ「なぜもつと早くお帰り
くださいませんでした。

みんな、あなたのお帰
りをお待ちしていまし
た。」

うさぎ「あんまりおそいので、
もうお帰りにならない
のではないかと心配し
ていました。」

めがみ「わたしだって早く帰っ
て来たかった。早くみんなの顔が見たかった。けれど
北風にじゃまをされて、どうしても早く帰ることがで
きなかったの。——みんなはどうしているの。どこに



いるの。」

うさぎ三「この間まで毎日毎日ここに集まって、きょうはお帰りになるか、あすはお帰りになるかと、みんな待っていました。——でも、いくらお待ちしてもお帰りにならないので、みんなあきらめて引きあげてしまいました。」

うさぎ一「くまの隊長は、いよいよあなたのお帰りがなければ、これから一年の間ねてくらすのだと言ひ、こま鳥さんは、あなたがいらっしやらなければ、子供たちを育てていけないと、すっかり考えこんでしまいました。」

うさぎ二「りすさんも、台所にもう食べる物がなくなつて、こま

つていました。」

めがみ「まあ、ほんとうにすまなかつたね。」

うさぎ三「それにあの村の子供たちも、毎日のようにここへ来ていました。きのうも来ていました。だがきょうはまだ来ていません。」

めがみ「そう。早く帰つて来たいと思つたのも、みんながわたしの名をよぶのが聞えたからです。帰つてこられてほんとうにうれしい。さあみんなをここへよびましよう。」

めがみ、小屋のそばへかけよる。

めがみ（戸をたたいて）「ねぼうのくまさん、起きなさい。」

小屋の中でうなる声がする。

くま「だれだ、戸をたたくのはだ
れだ。」

めがみ「だれでもいいから出ておい
で。」

小屋の中でごどごどという
音。戸があく。大きなくま
がのっそり出て来る。めが
みはいそいで木のかげにか
くれる。

くま「だれだ。せつかくいい気持
でねていたのに。」

くま、あたりを見回す。

くま「おや、おかしいぞ。(首をかしげる) なんだかあたたかい
ぞ。あたたかい風がふいて来るぞ。」

木のかげからめがみがわらいながら出て来る。

くま「あつ、春のめがみさまだ。もうお帰りにならないのか
と思いました。」

めがみ「すみませんでしたね。早くみんなをよびましょう。わ
たしは早くみんなに会いたい。」

くま「うさぎくん、みんなを早くよんでおいでよ。
めがみ「わたしがよびましょう。」

ふえを取って強くふく。



きつね、りす、こま鳥など
が出て来て、めがみをとり
まいて歌いながらおどる。

わらび
わらび
いついつもえる
やまやき
のやき
まだ火はあかい



つぐし、たんぼぼ、すみれ
などが出て来てならぶ。
めがみ「うれしい、ほんとうにうれ
しい。早く子供たちが来ればいいのに。」
みんなだまっている。



めがみ「だれか子供たちのところへ行つて、わたしの帰つて来
たことを知らせて来てくれませんか。くまさん行つて
くれませんか。」
くま(言いにくそうに)「わたくしはだめです。子供たちがわた
くしのすがたを見れば、おどろいてにげ出すに決まっ

ています。」

めがみ「それはそうですね。そうそう、こま鳥さん。あなたが
いい。」

こま鳥「こまったように」実は、わたくしの子供たちが、からだ
をわるくしてきますので、わたくしは手がはなせない
のですが。——りすさんはどうでしょう。」

りす「わたくしはとてだめでございます。森の中にばかり
いて、村の道をよく知らないものですから。」

めがみ、こまった顔をする。うさぎ一めがみの前に進み
出る。

うさぎ一「わたくしが行ってまいりましょう。」

めがみ「あなたはだいじょうぶですか。」

うさぎ一「ええ、だいじょうぶです。わたくしは足も速いし、村
の道をよく知っていますから。——ところで、子供た
ちにあなたのお帰りを、どうやって知らせたらよいて
しょうか。」

めがみ「花をたくさんつんで、子供たちに配っていらっしやい。
そうすれば、子供たちにはすぐわかるから。」

きつね「なるほど、それは名案ですね。」

めがみ「さあ、みんな花を集めましょう。」

みんな別れて仕事にかかる。

こま鳥「あら、ここにたんぼがあった。——これはわたしの



おくりものにちょうどい
い。

リナ「あ、かしの木が芽を出し
ている。——これはわた
しのおくりものだ。」

くまはうるうるする。

くま「だめだ。とてもできない。
こんなこまかいことはわ
たしにはできない。わた
しにできる仕事はないだ
ろうか。」

くまはそのそのと去る。ほかのものは続けてはたらく。
くまはにこにこしてかごを持って出て来る。

くま「さあ、かごを見つけて来たよ。この中へ入れるといい。
めがみ「いいものを見つけてくれましたね。ありがとうございます。あり
がとう。」

くま「いいえ、どういたしまして。」
めがみ「さあ、みんなここへ花を持っていらっしやい。」

みんな、花をかごに入れる。めがみはそれをうさぎにわ
たす。うさぎのほかはみんな退場する。

うさぎ「さあ、大いそぎで行こう。」

うさぎ「退場。」

二の場面

同じ森の中。あたりの
けしきはまったく春に
なる。春のめがみをは
じめ、前の場面のもの
がみんな出て来る。

きつね「ずいぶんおそいね」
りす「もう帰って来るだろう」。

うさぎ一「がやっと帰っ
て来る。」



うさぎ一「行ってまいりました」。

めがみ「ご苦労さま」。

みんな「うさぎさん。お帰りなさい」。

みんなはうさぎを囲んで、いろいろたずねる。遠くより
「春のしらべ」が聞えて来る。

めがみ「おや、音楽が聞える」。

みんな耳をすまます。めがみまん中に進む。

めがみ「ね、子供たちのうれしそうな声が聞えて来ますよ」。

みんな「あつ、子供たちだ」。

めがみ「だんだんこちらへ来るでしょう。さあ、みんなかくれ
ましよう」。



みんなかくれる。

子供たち、めいめいに手に花を持ち、話をしながら出て来る。

子供一「ここにも足あとがついている。」

子供二「うさぎだ。うさぎの足あとだ。」

子供三「この花はうさぎが持って来てくれたにちがない。」

子供四「こま鳥がいつしよかもしれない。これはこま鳥のすき

な花だから——」。

子供一「りすもいつしよかもしれない。かしの芽があつたもの。」

子供二「春のめがみさまが帰っていらつしやつたしるしに、みんなにくださつたのだわ。」

子供三「そうだ、そうだ。」

子供四「みんなでそろって、おれ

いの歌を歌いましょう。」

子供たち、歌いながら手をつないで歩き出す。めがみのふく、ふえの音が聞える。木のかげから、めがみをはじめみんなが出て来て、子供といっしょに歌いながらおどり回る。

二 明かるい学校

(一) 先生のおみやげ

一

「この次の月曜日から、しばらく、みんなとお別れです。青木先生が言いました。」

「えっ、どうしてですか。」

先生、どこへいらっしやるのですか。」

みんなは、おどろいて聞きました。

「東京へ行って勉強して来るのです。二週間たったら、また

すぐに帰って来ますよ。」

先生がそう言ったので、みんな

なほほっと安心しました。先生

はわらいながら、

「まあ、先生もしばらく生徒に

なつて来るといふわけです。」

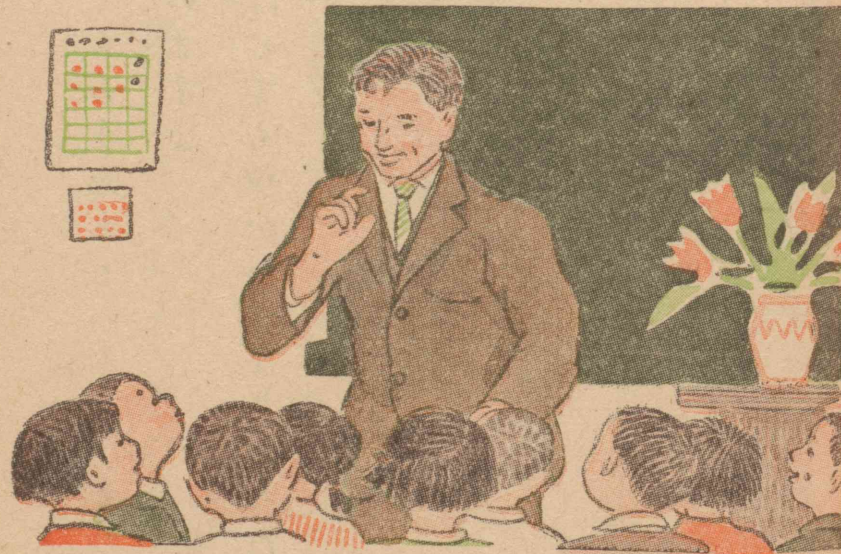
と言ったので、みんなはわつと

声を上げてわらいました。

「先生が生徒になるなんておか

しいな。」

「先生のそのまた先生がいるん



ですか。」

「それはいますよ。先生が教えてもらう先生もいるし、その先生の、そのまた先生だっていますよ。」

と、先生が言いました。みんなはとてもゆかひになりました。そこで、

「先生は東京へ行ったことがあるのですか。」

「どこへとまるのですか。やど屋ですか。」

「先生、まい子になったらだめですよ。」

「先生、早く帰って来てください。」

などと、いろいろのことを言いました。

「なあに、これでも東京で生まれたのだもの、まい子になん

かなるものか。先生のおかあさんといさんは、今でも東京に住んでいるんですよ。」

「ああ、それでは先生はやど屋ではなしに、おかあさんの所へとまるのですね。」

「それは決まっていけない。何しろ、日本じゅうのあちらこちらの地方から、学校の先生ばかりがおおぜい集まるのだから、みんなでいっしょにとまるようになるかもしれない。」

先生はまじめな顔をして言いました。

「まあ、それより、先生のいない間、みんながよく勉強してくれるかどうか心配だ。」

「だいじょうぶです。」

「ぼくたち、先生がいなくてもよく勉強します。」
みんなは声をそろえて言いました。
「それで先生も安心しました。帰りにはおみやげを持って来るからね。」

二

先生がこう言って東京へ行ったあとで、みんなはほんとうによく勉強しました。校長先生と北川先生が、かわり合って教えに来ました。

「みんなよく勉強していますね。これなら青木先生も安心して勉強できますね。」

と、校長先生も北川先生も、いつもほめてくれました。

ある日のことでした。黒板のよこに手紙がピンで止めてありました。

「青木先生からの手紙だ。」

だれかが見つけて言いました。みんなは一どに手紙の所にかけよりました。

「前的人是少しかがんでくれないか。」

「読んだ人はかわってくださいよ。」

「それより、前にいる者が声を出して読んだらいい。」

「そうだ、そうだ。」

そこで、いちばん前にいたきみ子さんが、大きな声で読みました。

みなさん、元気でしょね。先生も元気です。毎日、朝からばんまで、生徒になって勉強しています。まだ、まい子にもなりませんから安心してください。

先生は東京へ着くと、すぐに今とまっているやどに来ました。ここは全国の先生ばかりが集まるやどですから、とてもゆかいです。夜は、あちらこちらの先生たちと、討論会をしたり、自分の学校や生徒のじまん話をし合って、これがまたおもしろいのです。だから、東京へ来てきょうで

四日目ですが、まだ一ども町を散歩したこともありませんが、みんなのことも、全国の先生たちに話しましたよ。

ああ、こう書いてみると、みんなの顔がひとりずつ目の前にうかんで来ます。もうあと十日間で先生は帰りますよ。では、それまで、みんな元気でがんばってください。

さようなら。

三

それからしばらくたって、青木先生の所へこんな手紙がとどきました。

青木先生、お手紙ありがとうございました。みんなとてもうれしく思いました。それで、これからみんなで少しずつ手紙を書きます。

先生、先生も生徒になって勉強しているのですね。ぼくたちと同じですね。とてもゆかいです。野口 正

生徒の先生

ばんざい

山川 友一

先生の生徒

わたくしたちは、校長先生と北川先生に教えていただいています。先生、早く帰ってください。中原 なお子
昨日、みんなで先生のおうちへ行きました。みんなで赤ちゃんをだっこしました。石川 みつ

先生、東京の小学校のようすをごらんになりましたか。みんな元気で勉強しているでしょうね。お帰りになったら、おもしろいおみやげ話をたくさん聞かせてください。

秋山 陽子

おみやげなんかありませんから、早く帰って来てください。い。中村 ひろし

手紙はまだまだ続いています。大きな紙に一ぱい書いてありました。

「どうです。これを読んでください。」

青木先生はうれしくなって、同じやどにとまっている。おぜいの先生たちにその手紙を見せました。

「あつ、青木先生が帰っていらっしやった。教室にはいった者はみんな、そう言つて先生のそばにかけよりました。」

「先生、お帰りなさい。」

「先生、お帰りなさい。」

「先生、いつお帰りになつたのですか。」

「いま帰つたばかりだよ。七時に駅に着いて、大いそぎでやつて来たので、ほら、このとおり。」

と、先生は、そばにおいてあつたりリュックサックをたたきました。

「そうそう、やくそくのおみ

やげを買つて来ましたよ。」

こう言つて、先生はリュック

サックのひもときました。

みんなは何が出て来るのか

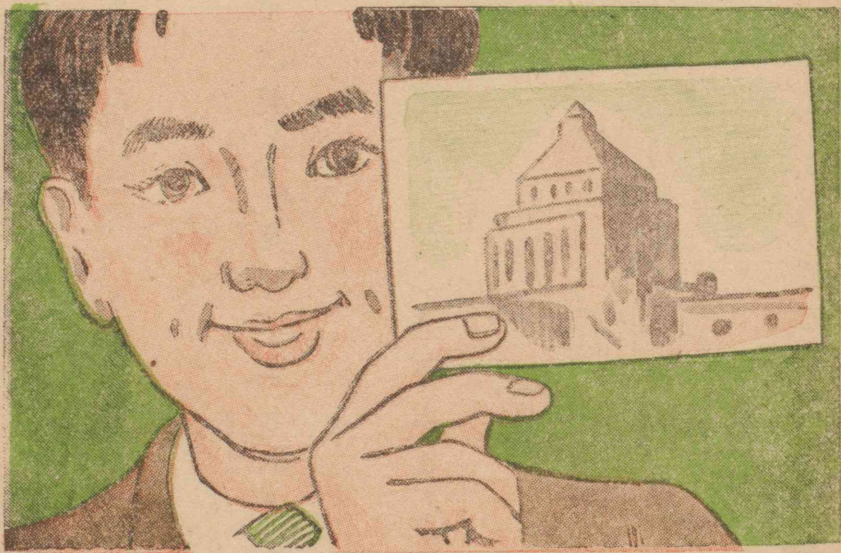
と、じつとリュックサックの

口を見つめました。一ばんは

じめに、めずらしいしゃん

が出て来ました。いろいろな

絵はがきも出ました。



「まあ、きれいな絵はがきね。」

雪子さんがうれしそくに言いました。

「まだまだあるよ。」

先生はそう言いながら、こんどは美しい童話の本を取り出しました。

その時、リュックサックから白いぼうしがころげ出しました。

「あら、かわいいぼうしよ。」

と、きみ子さんが言いました。

「ああ、これは、先生のうちの赤んぼうのおみやげだ。」

と言って、先生はわらいました。

つぎつぎといろいろな本が出て来ました。工作の本、げき

の本、それからローマ字の本もありました。

「わあ、すごいな。」

「すばらしいわ。」

みんなはかわるがわる、それを手に取ってよろこびました。

(二) こういう友だちがいる

運動場を作った小学生

自分たちの力で、三年もかかって、自分たちの運動場をこしらえた友だちがいます。東京のある小学校の生徒たちです。この小学校の校舎は、鉄きんコンクリートの三がいで建て

すが、校庭はわずか八百つぼしかありません。それでは、千五百人の生徒の運動場としてはせますぎます。上級生が野球をしていると、おにごっこをしている、一年生や二年生の生徒にぶつかります。きゅうくつでたまりません。

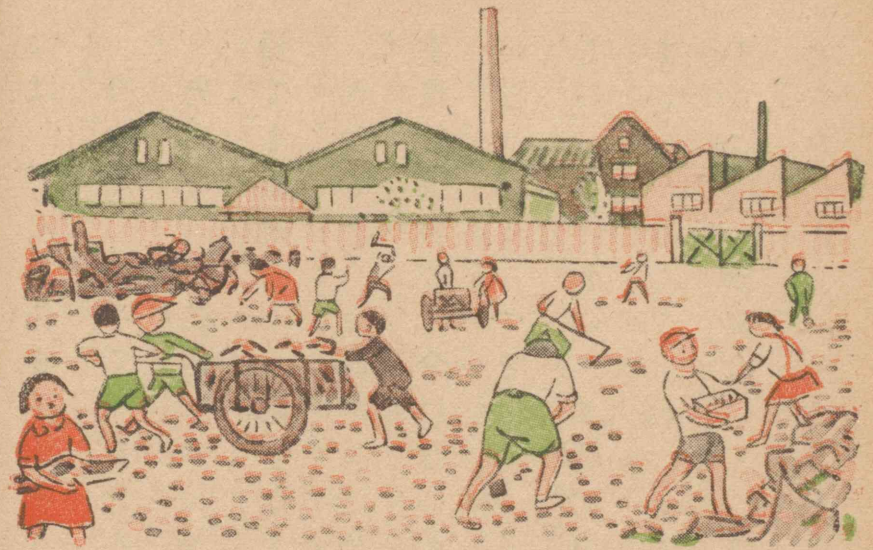
それで生徒たちは、もっと広い運動場がほしくてたまりませんでした。自治会でもこのことを何回もそうだんしました。そしてとうとうある自治会の時、学校の上この工場にあき地を借りられないだろうかという者が出て来ました。あき地といつても、鉄くずやこわれた機械がたくさんおいてあつて、そのままでは使えません。このくず山をかたづけるのはたいへんな仕事です。しかし生徒たちは、運動場を広くするため

には、どんな仕事でもやり通そうと決心しました。

自分たちの手で、自分たちの運動場を作ろう。

先生も、生徒たちのねっしんな気持に動かされました。工場でも気持よく土地をかしてくれました。

さっそく、生徒たちは仕事にとりかかりましたが、まず、学校に道具が十分ないのでこまりました。そこで、たりないシャベル、つるはし、くわなどは、みな家から持って来ました。さいわい、工場のリヤカーも四五台借りることができました。みんなはねっしんにはたきました。けれども三月までには、仕事はいくらも進みませんでした。六年生は、「あとをたのむよ。」と言い残して卒業していきました。



次の年も、新しい六年生を中心に、天気さえよければ、上級生は毎日仕事を続けました。くわで土をほり起す者、それをリヤカーにつんで一か所にまとめる者——みんなは手分けをして、いっしょうけんめいにはたらきました。

もちろん、先生も手つだってくださいました。小さい一年生や二年生も、ほうきではいたり、

小さい石ころを拾ったりして手つだいました。工場の人もひまをみては手つだってくれました。日曜日にはおとうさんたちが、大きな機械をかたづけてくださいました。

生徒たちは昼休みにはたらきました。体そうの時間も、ほうか後もはたらきました。だれのためでもありません。自分たちの運動場を少しでも広くするためです。だから、だれも不平を言いませんでした。

こうして、その年には半分以上かたづきました。運動場は広くなって、野球ができるようになりました。その年の六年生もまた、「あとをたのむよ。」と言い残して、卒業していきました。次の年のはじめの自治会で、秋の運動会までに、すっ

かりかたづける予定を立てました。

全校生徒は力を合わせて、仕事を続けました。夏休みの間も、交代で仕事をしました。もう一息です。九月にはいって、みんなはさらに力を入れてはたらかしました。こうして、残った鉄の山は十月中にすっかりかたづきました。

そのあとローラーをかけて、地ならしをしました。そしてとうとう、運動場ができた時、みんなは手を取り合つてよろこびました。

十一月三日の運動会は、新しい運動場でにぎやかにおこなわれました。いっしょにはたらいた卒業生はもちろん、工場の人たちもこの運動会に加わりました。

自分たちの力で、自分たちの運動場をこしらえた小学生——こういう友だちがいます。

方言をあらた

めた小学生

ほかの土地の人にはわからないような方言はやめて、よいことばを使いましょう、という運動が、わたくした



ちの学校でおこなわれていきます。この運動は、わたくしたちの組の山田さんが始めたものです。

山田さんは、去年おとうさんが転任されたので、ここの学校にかわってきたのです。学校がかわって一ばんこまったことは、友だちの使うことばに方言が多くて、わかりにくいことでした。

そこで山田さんは、自治会の時、

「わたくしたちは学校でよいことばを使いましょう。」

と、みんなにそうだんしました。みんなは、その時はそれになんかできませんでした。使いなれたことばをあらためるのは、なかなかできにくいことなので、そのやくそくはまもられま

せんでした。中にははんたいする人もありました。

しかし山田さんは、とくにねっしんな五人の友だちといっしょに、

一、どんな時でもわたくしたちは方言を使わない。

二、友だちが使った時はすぐ注意し合う。

という二つのことをかたく



やくそくして、方言を使わないようにつとめました。そのため、ほかの友だちから、「すましや」などとひやかされたりしました。それでもこの六人は、やくそくをかたくまもり通しましたので、だんだんほかの友だちもなかま入りをして来るようになりしました。

そこでこんどは、組全体の人が、「どうしたらよいことばを使うようになるか」ということを、自治会でねっしんにそうだんしました。そうして、いちばん多く使われる方言を、二週間ごとに四つか五つぐらいずつえらんで、これだけは必ずあらためることに決めました。もしうっかり使った時には、必ずその場で言いなおすことにしました。また教室には、組

全体の名を書いた表を作り、学校でこの方言を使った時は、必ずその人の名の所に、黒まるをつけることにしました。はじめのうちは、だれも黒まるだらけてしたが、月日がたつにつれて、だんだん黒まるが少なくなっていきました。

このように、わたくしたちの組の者が、みんなよいことばを使うようになったので、六年や五年の上級生がこれをまねるようになり、いつか一二年の下級生までもまねして、近ごろは全校を通じ、今までのひどい方言は半分以上もへりました。友だちのはんたいをおしきったゆう気と、どこまでもあらためようとしたしんぼう強さが、このようなせいこうをおさめたのです。

三 楽しい家庭

(一) 母の日

一

わたくしは学校が終ると、大いそぎで走って帰りました。家では弟のまさおちゃんが、わたくしの帰るのを待っていました。

きょうはわたくしたちの母の日です。わたくしはさっそく買物かごを持って、まさおちゃんと買物に出かけました。

「ねえさん、おかあさんはね、ぼくが買物に行くんだと言っ

たら、何を買うのって聞くんだよ。でも、ぼくないしょだから何も言わなかったよ。」

まさおちゃんは歩きながらそう言いました。わたくしはなんだかうれしくて、しぜんに足が速くなって、どンドン走っていきました。

市場で、にんじんと、さやえんどうと、みつばと、キャベツを買いました。それからとうふを二ちよう買いました。

わたくしたちは家に帰ると、台所でさやえんどうのすじを取り始めました。そこへねえさんが学校から帰って来ました。かばんのほかには、ふろしきづつみをかかえていました。あけてみると、肉とたまごど、それに赤いきれいなちごがあり

ました。

「わあ、すごい。」

まさおちゃんはそう言って、
食べたそうな顔をしました。

ねえさんはおかあさんに、

「ごちそうができるまで、見

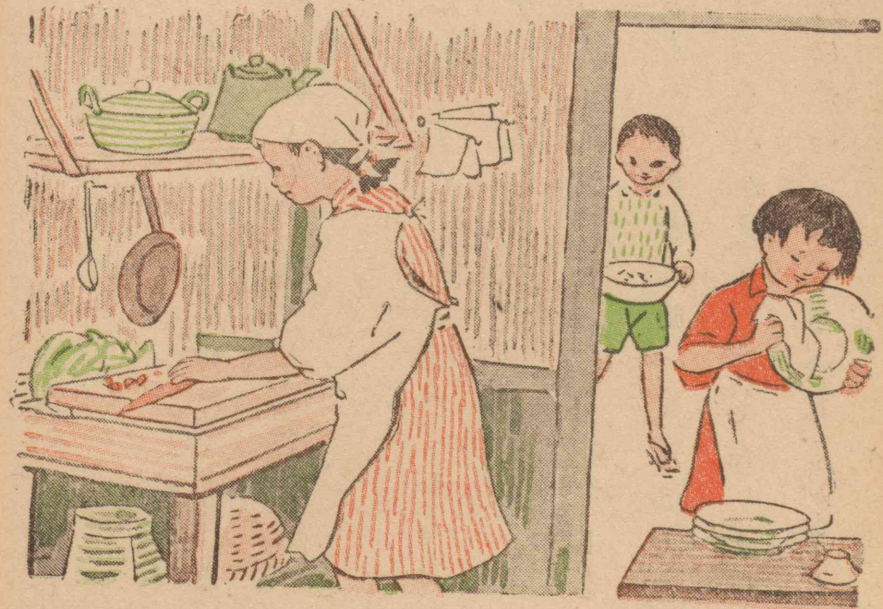
にいらつしやらないでね。」

と言いながら、エプロンをか

けました。

ねえさんは中学二年生です

が、いつもおかあさんの手つ



だいをするので、ごちそうを作るのがとてもじょうずです。

お米をとぐのも、野菜をきざむのも、おかあさんと同じぐら
いじょうずにします。

わたくしとまさおちゃんは、ねえさんに言われるとおりに
野菜をあらったり、おさらをふいたりしました。ふたりとも
こういうことをするのははじめてなので、うれしくていつし
ようけんめいにはたらきました。

いつの間にか、おとうさんがお帰りになったようです。

「子供たちはどうしているの。」

おとうさんがおかあさんに話している声が聞えて来ました。

「きょうは母の日だからというので、みんなでごちそうをこ

しらえていますよ。

「そうか。みんなもずいぶん大きくなったものだなあ。」

「ほんとうですわね。」

わたくしたちは台所で、思わず顔を見合わせてわらいま
した。

二

ごちそうはすっかりでき上がりました。たいへんおいしそ
うです。白い大きなおさらに乗っている黄いろいオムレツ、
にんじんとさやえんどうのにつけ、赤いおわんにはいつてい
るみつばとおとうふのおつゆ。おぜんのまん中には、ガラス

ばちに入れたまっかないちごがおいてあります。

まさおちゃんは、大よろこびで、びよんびよんと飛びはねな
がら、おかあさんとおとうさんをつれて来ました。

「まあ、こんなにくさん、よくできましたね。」

おかあさんは、そうおっしゃって、しばらく立ったまま、ご
ちそうとわたくしたちの顔とを、見くらべていらっしやいま
した。おとうさんも、

「やあ、これは、これは、たいへんなごちそうだなあ。」

と、大きな声でおっしゃいました。

おかあさんとおとうさんと、ならんでおすわりになりました。
た。ねえさんはいつもおかあさんがおすわりになる場所にす



わかりました。まさおちゃんはおかあさんのとなりになり、わたしはねえさんのとなりになりました。

まず、ねえさんが、

「きょうは母の日です。今までわたくしたちを育ててきてくださったおかあさんに、そして世界じゅうのおかあさんたちに、心からおれいを言っておいわいをする日です。ほんとうは五月の第二日曜日が母の日なのですが、うちでは、あすはおとうさんが旅行にお出かけになるので、一日くり上げてきょうにしました。そして、ゆうべ三人で相談して、きょうの夕ごはんをわたくしたちだけでこしらえて、おかあさんにごちそうしてあげよう、と、いうことに決めたので

す。おかあさんのようにじょうずではありませんが、わたくしたちがいっしょうけんめいに作ったごちそうですから、きつとおいしいと思います。どうぞ、ゆっくりめしあがってください。と、あいさつをしました。それから三人で、

「おかあさん、ありがとうございます。」と、声をそろえて言いました。おかあさんはにっこりして、

「みなさん、どうもありがとう。おかあさんはうれしくてたまりません。」

とおっしゃいました。おとうさんがあらたまつて、「いただきます。」

と、大きな声でおっしゃったので、みんな大わらいをしました。

きょうはおかあさんもおとうさんも、とてもうれしそうでした。おかあさんたちがよろこんでくださったので、わたしたちもほんとうにうれしく思いました。

わたくしは、ふつうの日でも母の日のように、おかあさんをよろこばせてあげるようにしたいと思いました。

(二) しゃしんちょう

一

この間、久しぶりに家に帰って来た誠一にいさんが、いよあすは北海道へ帰ることになりました。いさんはまた向こうで土地の開こんを続けるのです。

おとうさんやおかあさんは、いさんの着物のせいをしたり、にもつを作ったりして、朝からたいへんいそがしそうです。周ちゃんもきょうはなんだか落ちつきません。

そこへしんるいの人や近所の人たちが、つきつきとお別れに来て、

「からだをだいじにして、元氣でおはたらきなさい。」
「これはおなかのいたむ時に、とてもよくきく薬です。」
などと言つて、いろいろなおくりものを持って来ました。
にいさんはその入たちに、いちいちていねいにあいさつをしていました。

周ちゃんはそのようすをながめながら、しきりに何か考へていましたが、そのうちにいそいで子供べやへ飛んでい

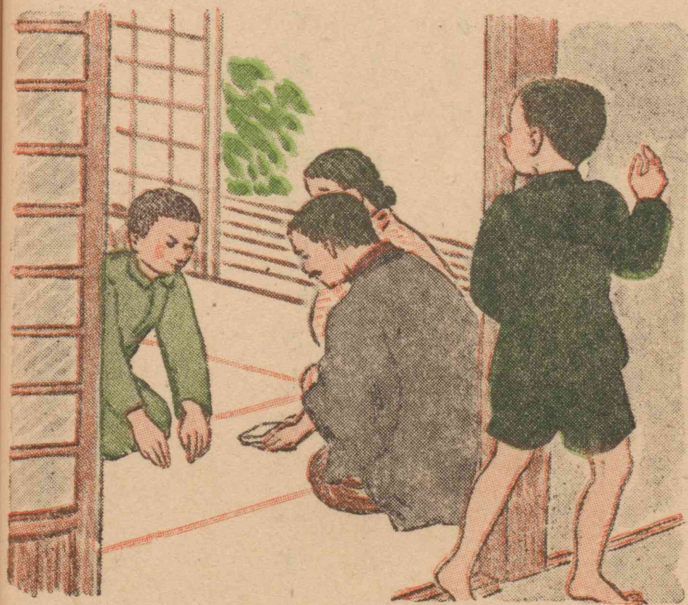
きました。

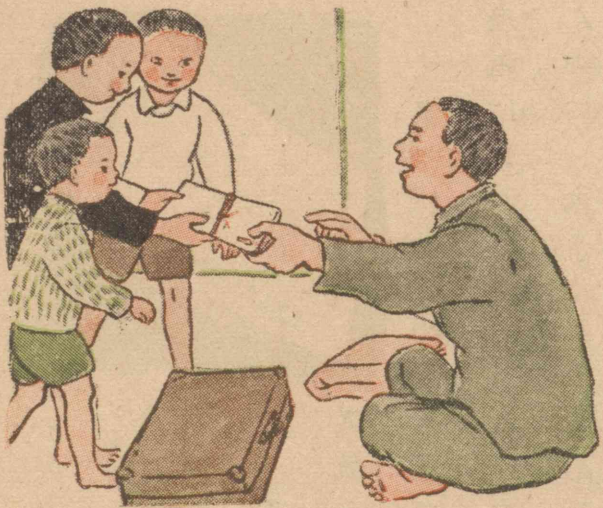
「おい、順ちゃんも善ちゃんも手つだうんだぞ。大いそぎだ。あそんでいたふたりの弟たちは、目をまるくして、周ちゃんの顔を見上げました。

「にいさんはあす帰るんだよ、にいさんにおくりものをあげなくては大めなんだよ。だれだつてみんなあげているよ。」

「そうだそうだ。」

と、すぐ順ちゃんが言いました。そしてしばらく考えてから、「ぼく、何をあげたらいいかな。うん、この間買ったいい消しゴムをあげよう。」
と言いました。





夕方になりました。

もうお客さんもいなくなったので、誠一にいさんは、いよ
いよ持って帰るトランクのしたくを始めました。

その時、周ちゃんと、順ちゃん
と、善ちゃんは、そろっていさ
んの前に出ていきました。

「いさん、これ、ぼくたちのお
くりものです。」

周ちゃんはこう言って、紙づつ
みをいさんの前に出しました。
赤い水引に、のしまでちゃんとか

「ぼくもあげるんだ。ぼくはろう石にするんだ。」
善ちゃんがそう言うと、「あははは」と、ふたりの小さいに
いさんたちはわらいました。そして、周ちゃんはいかにもに
いさんらしいようすで、
「そんなものは誠一にいさんにはだめだよ。ぼく、とてもい
いものを考えているんだけどね。」
と言いました。

それから、周ちゃんはふたりの弟といっしょに、何かひそ
ひそと相談を始めました。



いてあります。

「ほう、これはこれは。」

にいさんはびっくりしたような顔をして、それを受け取りました。そしてつづみ紙を開いてみました。

十まいばかりの画用紙で作ったちようめんが出て来ました。表紙はクレヨンできれいな花の絵がかいてあります。そのまんな中に、大きく「しゃんちやう、はしの方に、「上原しゃんかん」と書いてあります。上原というのは周ちゃんたちの家の名前です。

「ほう、上原しゃんかんか。」

と、にいさんは目をまるくしながら、表紙をめくりました。そこにはクレヨンで、大きくおとうさんの顔がかいてありました。ふだん、めがねを鼻の頭へ乗せるくせが、そのままかいてあります。そのよこに、「上原鉄治 五十一さい」とえんぴつで書いてあります。

次をあけると、おかあさんです。目じりにしわをよせて、やさしくわらっています。だが、口が少しまがっているのはおしいことでした。「上原みか 四十五さい。」

上原鉄治 五十一さい



上原みか 四十五さい



上原周次 十一さい



次が「上原周次 十一さい。目がびっくりするほど大きく、元気のよい顔です。次が「順助 九さい。顔が少しいびつてしたが、順ちゃんらしくやさしい顔にかけています。うまい。これはうまい。どれもこれもまったくとくそつくりだ。」

にいさんはいかにもかんしんしたように、力を入れて言いました。三人は顔を見合わせてにっこりしました。

次が「善太 七さい。頭でっかちですが、りこうそうな顔です。次が「みよ子 五さい。」

おぼんのようなまるい顔に、おちよぼ口がついています。

にいさんは終りまで見てしまうと、しゃしんちようをひぎに乗せたまま、もう一どばらばらと見かえました。

「よくこんなにくまうできたものだね。だれがかいたの。」

「絵はぼくがかいたの。こんなにくまう紙を切ったり、とじたり、名前を書きこんだりしたのは順ちゃんです。それから善ちゃんも道具を運んだり、いろいろお手つだいをしました。」

「そうか。みんなでなかよくこしらえたんだね。だから、こんなりっぱなものできたのだ。ありがとう。ありがとう。にいさんは手をのばして、周ちゃんの頭から順々に弟たち

の頭をなでました。

「これは何よりのおくりものだ。これが一さつあれば、いつでも家じゅうの人といっしょにいるような気がする。どんな時でも、にいさんはさびしくないよ。遠い北海道にいたって、家にいるのと同じだもの。」

そう言っ、にいさんはしゃんちようを、トランクのーばんおくへだいにしまいました。

周ちゃんも、順ちゃんも、善ちゃんも、みんななんだか、自分たちがにいさんのトランクの中にはいつていくような、うれしい気がしました。

四 自然とともに

(一) 川原遊び

電車をおりて駅のかいさつ口を出ると、広い道がある。両側の麦ばたけでは、麦がもう四十センチぐらいにのびていた。そこをずっと歩いていくと、間もなく川原に出た。春の太陽にてらされて、川の水が銀のうろこのように、まぶしく光っている。

みんなすっかりよろこんで、ばらばらになって走りだそうとした。先生が、



あちこちからみんなのさわ
ぐ声も聞える。つるりとすべ
る。もう少ししてたおれそうだ。
足をふみしめてゆっくり歩い
ていく。すきとおった水の中
の石は、赤、白、黒、とりど
りに美しく見える。そうっと
川の中に手を入れて一つ拾っ
てみた。まっ白でとても美し
い、すべすべした石だった。
落さないようにしつかりにぎ



「あまり遠くへ行かないよう
に。帰る時は、またここへ
集まるのですよ。」
とおっしゃった。
わたくしはくつ下をぬいで、
寺田さんや西田さんといっし
よに、きれいな水の中にそつ
とはいった。
「あ、冷たい。」
「あら、きれいな石がたくさ
んあるわ。」

ってひきかえした。

川原で遊んでいると、先生が、

「食事にしましょう。」

とおっしゃった。わたくしは西田さん、寺田さんとまるくわのようにすわって、おかあさんの作ってくださったお弁当をいただいた。とてもおいしかった。

ごはんがすんでから、また川の中に、寺田さんといっしょにはいった。

「向こうのはなれ島まで行ってみましょう。」

手をつないで、一足一足、おそろおそろ歩く。だんだん深くなって、とうとうひぎの上まで水につかった。うっかりす

ると流されそうになる。

きゆうに水が浅くなって、やっどはなれ島に着いた。そこでまわりのけしきをしばらくながめた。すみきった水の流れに、日の光がきらきらとゆれている。

また、ふたりで冷たい水に足を入れた。

帰りの時間になったので、前の場所に集まった。寺田さんはまっ白なすなを、ハンケチにつつんで持っている。西田さんはきれいな玉石をカチカチならしている。

わたくしは、一ばんはじめに拾ったあのすべすべした石を、だいに持って帰った。

(二) 山の少年のたより

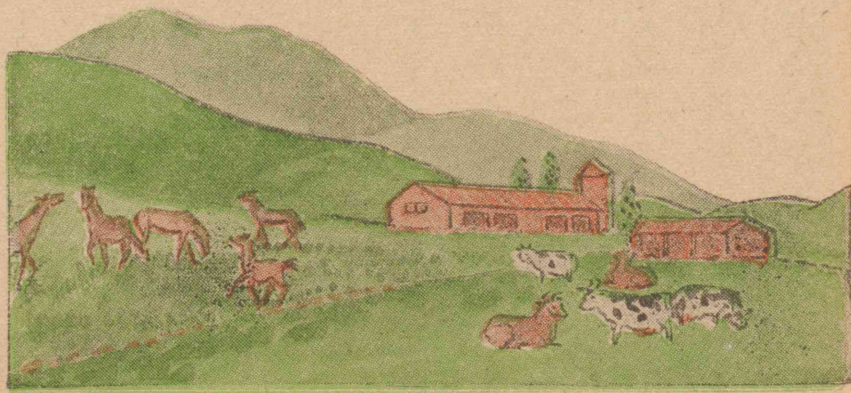
よし子さん、おたよりありがとう。

おじさんはじめ、みなさんお元気だそうで、ぼくもうれしく思います。こちらみんな元気です。

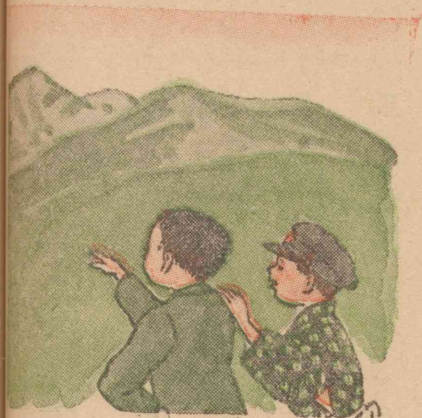
よしさんは、この間、海へ貝を取りに行ったそうですね。ぼくも一どでもよいから、海へ行ってみたいと思います。広い広い海の中で、一べん泳いでみたいです。よし子さん、これからももっと海のようにすを知らせてください。

ぼくらの村は山に囲まれています。だから、ぼくは山が大すきです。

この前の日曜日、ぼくは友だちと東の山へ登りました。ちょう上まで一ども休まないで登りました。村から十分も行くと、広い牧場に出ます。そこでは、馬や牛がむれを作って、草を食べています。この馬は大ていきょうそう馬だそうです。それから、牛はほとんどちちをしぼるホルスタイン種の牛です。朝と夕方には、牧舎のおじさんやおばさんがちちをしぼります。しぼったちちは、ふもとの町の工場にト



ラックで持っていくます。バターや、チーズや、ミルクのかんづめを作るのです。いよいよ夏になると、ぼくのおとうさんも牧場の仕事を手つだいにいきます。牧場の草原を通りすぎると、岩がごろごろしている山道になります。



ちよう上に着いた時は、友だちもぼくもうっすらとあせをかいていました。西の方を見ると、雪の残った北アルプスの高山がすぐ近くに見えました。ところどころきらきらとかがやいて、思わず「美しいなあ」とさげびました。岩にこしをかけて、に



ぎりめしを食べました。それからぼくらは高山植物をさがしました。去年、いわかがみといわぎきようを見つけた所まで行ってみましたが、まだ何もはえていませんでした。

ふたりががっかりしていると、すぐうしろで、「モオー」と、牛がなきました。おどろいてふりかえると、ぼくらのすぐ下の所に牛が二頭来ていました。

牛は山登りがじょうずです。天気の良い日には、よくちよう上まで登って来ます。

ぼくらはちよう上の平らな所でねころんで話をしたり、遠くの山をながめたりしました。それから、絵を三まいかきました。

そのうち少しさむくなってきました。ぼくらはいそいで山をおり始めました。ごろごろした石ころで、すべったりつまずいたりして、時々ひやつとすることがあります。さっきの牛はもうその辺にはいませんでした。

ぼくらは牧場までおりると、草の中にこしをおろして休みました。それから牧舎で、おじさんにちちを二はいのませてもらって帰りました。

この手紙を書いているまどの近くに、うぐいすが来て鳴い

ています。はたけのじゃがいもはだいぶ大きくなってきました。もう一月もすると、花がさいてまっ白になります。手紙の中にこの間かいた絵を一まい入れておきます。よし子さんも、こんどは海の絵を送ってください。ではみなさんによろしく。

さようなら

ただし

六月二十日

よし子さん



五 時計

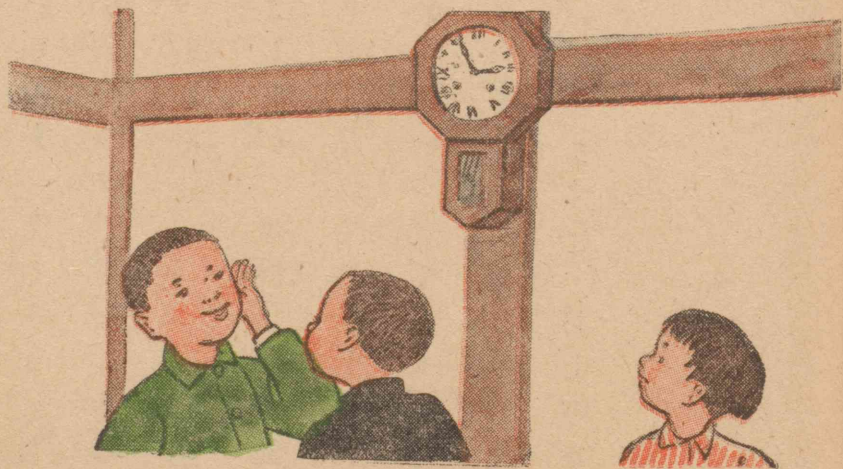
(一) 古い時計

「こんちは、こんちは、こんちは。」
と、時計がへやの柱の上で鳴っていました。

この時計は古い古い時計でした。この時計が、わたしのうちで音をたてるようになってから、もう二十年あまりにもありません。その長い年月の間には、わたしのうちはあちこちとうつりましたが、この時計ばかりは変わらずに、わたしのうちに残っていました。そして、古くなればなるほど、機械の

よいことがわかってきて、今ではうちの者に大切に思われるようになりました。

「いったい、この時計は、函館のおじいさんが、はじめてわたしのうちを見に来た時に、買ってきて来てくれたのでした。その時から、わたしのうちでは、この時計の音がするようになったのでした。それから、おじいさんが函館からわたしのうちへたずねて来るた



びに、この時計が相変わらず動いているのを、楽しそうにながめ、カチカチ、カチカチ、音のするうちの中で、わたしの子供の顔を見るのを、楽しみにしていました。

あのおじいさんも、もうなくなりましたが、時計はまだ動いています。さすがに、あのおじいさんの見立てた時計だけあって、八角形のがんじょうな作りから、いつまでたっても機械のくるわないところまでが、おじいさんの気しようにそっくりです。この古い時計の音を聞いていますと、おじいさんが子供の名をよぶように、

「たろさん、たろさん、たろさん。」

と、たろうをよぶようにも聞えますし、

「じろちゃん、じろちゃん、じろちゃん。」

と、じろうをよぶようにも聞えます。

「さんちゃん、さんちゃん、さんちゃん。」

と、さぶろうの名をよぶようにも聞えます。それからまた、末子の名をよぶように、

「すえちゃん、すえちゃん、すえちゃん。」

とも聞えます。

この時計の顔は、二十年あまりの長い年月とともに、古いしわのできたところまで、あのおじいさんになってきました。長いはりと短いはりの動いていく、一時から十二時までの数字の中には、はげて消えかかったところもあるくらいです。

それでも、この時計は音をやめようとしません。あのおじいさんのやさしい心は、時計に残って、いつまでもわたしのうちに残っているのです。

おじいさんは子供のすきな人でした。函館から出て来る時には、子供のところへ、よくおみやげを持って来てくれました。そのあたたかい心が、この時計にまで残っていると思えて、わたしのうちで子供のために、三時のおかしても取り出そうとする時に、子供のかせいをするのはこの古い時計でした。

「どっさり、どっさり、どっさり。」

と、三時のたびに時計が鳴りました。

(二) いろいろな時計



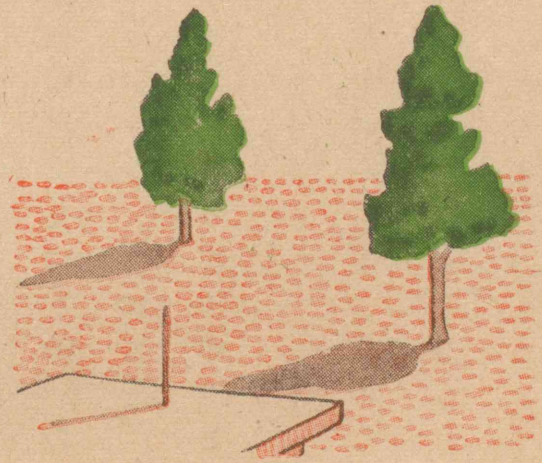
時計こくを知るのに、あなたがたはどうしていますか。時計を見ますね。どんな時計を見ますか。ふりがが休みなく動いている柱時計でしょうか。カチカチと秒をきざんでいるうで時計でしょうか。それとも、一時間ごとにおもちゃのはとが飛び出して、ポツポツと時をつげるはと時計でしょうか。

このような時計は、古いむかしにはなかったのです。そのころの人は、いろいろくふうをして時計こくを計ったのです。

日時計

ここに一本の木が立っています。

太陽が東から上り始めると、地面にその木のかげが長くうつります。太陽がだんだん高くなると、木のかげは、だんだん短くなりながら動いて



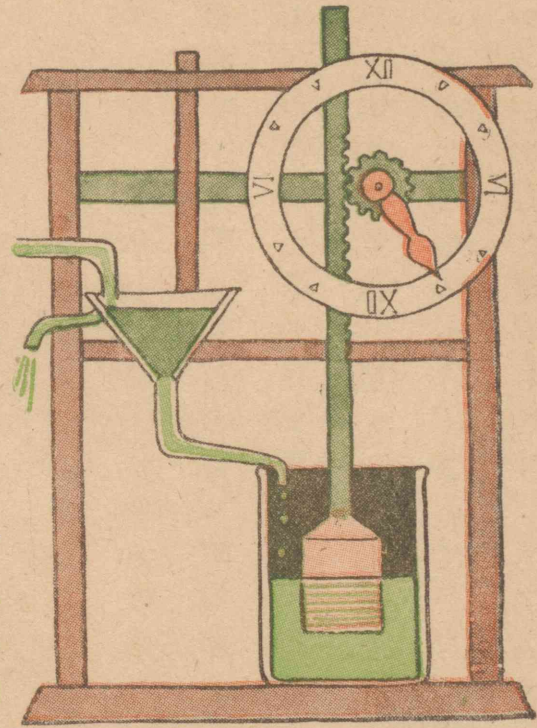
いきます。太陽が真上に来た時は、かげが一ばん短くなります。それからまた、かげが長くなりますが、こんどは、ほんたい側に木のかげができます。このかげのでき方を使って、時こくを計るようにしたのが日時計です。日時計は一本のぼ

うと目もりばんがあれば、だれでもかんたんに作れるので、広く用いられました。しかし、くもった日や雨の日、また夜などには日時計は役に立ちません。また、しじゅうゆれている船の中などでは使うことができません。

水時計

水時計が発明されたのも、ずっと古いむかしのことで、今から二千年以上も前だと言われています。

はじめのうちは、底に小さなあなをあけたつぼに水をいっぱい入れて、水のへりぐあいで、どのぐらい時間がたったかを知ったのだと思われれます。もちろんそれでも正確な時こく

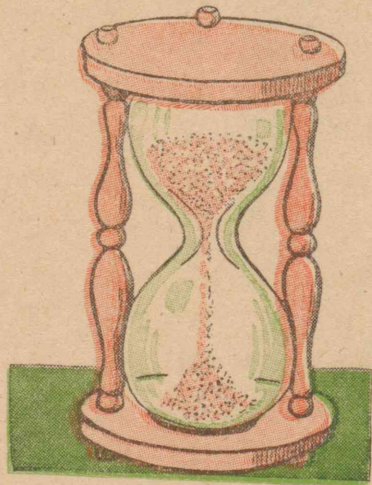


を知ることはできま
せんでした。しかし、
日時計とちがって、
雨の日や夜も使える
し、家や船の中でも
使えるので便利でし
た。

その後、いろいろ改良して、右の図のように、入れ物を二
つ作って、下の方の入れ物にうきを入れました。そのうきが
ういてくることによつて、かんたんに時こくを知ることがで
きるようになりました。

すな時計

すな時計のりくつは水時計と同じことです。水の代わりに
すなを使うだけのことです。すな時
計は図のように、まん中がくびれた
ガラスびんの中に、すなを入れたも
のです。上のびんから落ちるすなの
量をしらべて、時間を計ることがで
きます。すなが全部下に落ちてしまふと、こんどはそれをさ
かさまにします。このようにして、すな時計は何どでも時間
が計れるので便利です。



ふりこ時計

ガリレオ・ガリレイという有名なイタリアの学者を知っているでしよう。このガリレオが十八さいの春のことでした。

ガリレオは、ピサの町にある大きな寺院に参拝しました。寺院に着いた時には、もうあたりはうす暗くなっていました。ちょうど門番が、堂につるしてあるランプに、火をつけようとしているところでした。ガリレオはなんの気なしにそれをながめていま



した。やがて、火をつけ終った門番が立ち去ったあとには、暗い堂の中に、ランプが大きく静かにゆれていました。

「一つ、二つ、三つ、四つ……」。

ガリレオは、左から右にゆれ、また左へもどって来るランプを、じつと見つめていました。

ランプのゆれはだんだん小さくなっていきました。そのうちに、ガリレオはふとあることに気がつきました。ゆれるランプが一回おうふくするのにかかる時間は、ゆれ方が大き

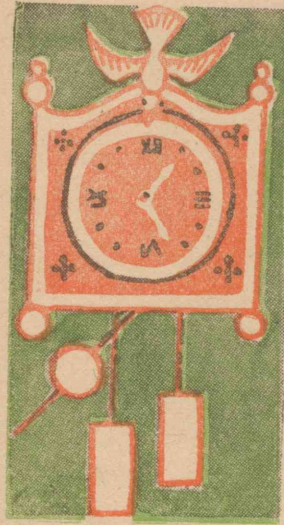


くても小さくても、どうも同じようです。

ガリレオは家に帰ると、さつそくひもに石をむすびつけて、それをふって実験してみました。すると左右にゆれる一回おうふくの時間は、いつでも同じではありませんか。

このことは大きな発見でした。

このガリレオの発見した、ふりこのりくつをおう用して、オランダの天文学者、クリスチャン・ホイヘンスという人が、ふりこ時計を發明しました。そうして、それがだんだん改良されて、いま方々の家にある柱時計になったのです。



六 注意して見よう

(一) かわったじゃがいも

ある日、洋一さんはおかあさんといっしょに、うらの畑に行った。じゃがいもが、葉をいっぱいひろげてしげっている。とても元気そうだ。いっしょうけんめいに作ったかいがあつた。洋一さんは思った。よそのおばさんが通りかかって、「よくできていますね」と、ほめて行つた。洋一さんはうれしくて、おかあさんの顔をそっと見ると、おかあさんもうれしそうだった。

洋一さんはそれから、
じゃがいもを見るのが
楽しみになった。毎朝、
学校へ行く前に、必ず
一どはうらの畑に行っ
てみることにした。毎
朝見ていると、じゃが
いもはあまり大きくな
らないように思われる。
しかし、葉は日に照らされて、
日ごとに黒っぽくなっていく
ようだ。



ある朝、洋一さんが畑へ行つて、草を取っていると、洋一
さんの目の前に変にひよろひよろした四五本のじゃがいもが
立っている。ほかのがみんな元気なのに、変だなあと思つて
よく見ると、くきにいもがなっているではないか。洋一さん
はふしぎに思った。学校へ行く時間がきたので、洋一さんは
学校へ行った。

学校から帰ると、洋一さんはすぐ畑へ行つた。そして元気
のないじゃがいもの前にかがみこんで、よくしらべてみた。
くきになっているいもが、土の中のじゃがいもどちがうのは、
ただ、色がむらさきがかつたみどり色になっているだけであ
る。洋一さんは、だれかいたずらをしたのではないかと、手

でさわってみた。しかし、いもはちゃんどくきについている。ふしぎだ、ふしぎだと、洋一さんはなんべんか口の中で言った。

夕飯の時に、洋一さんはおとうさんとおかあさんに、そのことを話してみた。そばでだまって聞いていた妹の令子さんが、

「そんなことってあるかしら。」

と、びつくりしたような声で言った。おとうさんはわらいながらゆつくりと言われた。

「そういうことは時々あることだ。それはね、根のあまり近くに肥料をやったから、根がくさったのだよ。根がくさつ

たので、葉にできた養分が根へ行けなくなって、くきにいもができたのだよ。洋一、おもしろいものを見つけたね。もっとよく見て来てごらん。きつとそのほかにも、いろいろのことが見つけられるよ。よく見て、それをちようめんを書いて、おとうさんに見せてくれなにかね。なんでもないよう



なことでも注意してよく見ると、それまで気がつかなかつた、めずらしい変わったことが見つかるものだ。物をよく見るということは、ほんとうに大切なことなのだ。むかしの発明や発見も、注意ぶかく物を見るということが土台になっっている場合が多いのだよ。

おとうさんにそう言われて、洋一さんは、いつだったかよそのおばさんに、じゃがいもをほめられた時のようにうれしかった。

洋一さんは、学校へ行く前も、帰ってから、畑に行つて、そのじゃがいもをいろいろしらべてみた。洋一さんはそれをちようめんにまとめた。

- (一) くきについているいもは、どれもむらさきがかつたみどり色をしている。
- (二) いもから小さな葉が出ている。一つ出ているのもあるし、二つ出ているのもある。
- (三) くきの上の方になつているいもはえだににて、ふつうのようにもようがついている。
- (四) もっと上の方のは、葉のつけ根がふくらんで、いもだけである。
- (五) くきの下の方になつているのは、まるくて土の中のいもと同じようである。

(二) 漢字の話

晴

わたくしは、漢字をたくさん書いているうちに、おもしろいことに気がつきました。「晴」という字は、「日」と「青」がなっています。「姉」という字は「女」と「市」がなっています。二つならんできてきている漢字は、このほか、

時 妹 計 細

など、たくさん見つかりました。

このことをおとうさんに話したら、おとうさんは、「それはよいことに気がついた。二つならんできてきている漢

字の、左側の方を「へん」、右側の方を「つくり」といって、「晴」時の「へん」は「日」だから「ひへん」、「姉」妹の「へん」は「女」だから「おんなへん」、「計」のは「こんべん」、「細」のは「いとへん」というのだよ。と教えていただきました。

「あねや、いもうと」は女のきょうだいをいうのだから、それで「おんなへん」がついているのだらうと思いました。

林 板 柱 根

なども、左側に同じ形をしたものがあります。

「林」は「はやし」、「板」は「いた」、「柱」は「はしら」、「根」は「ねて、





「てへん」、「海」などの左側のは「水」の字の変わったもので、「さんずい」というのだそうです。
 また、
 花 茶 草 葉
 家 客 実 室
 などは、みんな上の方に同じ形のものがあります。この上の方にあるのは、「かんむり」というのだそうです。むかし、頭にかぶるものとして、「かんむり」というものがあつたからでしょう。「花」などの字の上にあるのは、「くさかんむり」、「家」などの字の上にあるのは、かたかなの「ウ」にしてい

みんな木にかんけいのあるものです。それで、左側にあるのは「木」だろうと思ひました。おとうさんは、「きへん」というのだと、教えていただきました。

休 何 作 体
 拾 投 持 打
 海 波 池 流

なども、左側にそれぞれ同じ形のものがあります。

「休」などの字の左側のは「人」の字で「にんべん」、「拾」などの字の左側のは、「手」の字の変わったもので





るので、「うかんむり」というのだそうです。

近 道 通 進

などにも、同じ形が見えますが、これはしんにゆう」というそうです。

「へん」や「かんむり」には、みんな名がついている
 そうです。「秋」秒などの字の「へん」は「きへん」の上
 に、かたかなの「ノ」の字をつけたような形をして
 いるので「のぎへん」「京」交などの上にあるのは、
 なべのふたを横から見た形にしているので、「な
 べふた」というそうです。なかなかおもしろい名
 がついているものだと思います。

七 夏の生活

(一) 林間学校

第一日

わたくしたちが林間学校に
 着いたのは、ちようどお昼ごろ
 でした。建物は小高いおかの上
 であって、教室を十ぐらい合
 わせたほどの大きなもので
 した。わたくしたちは全部で
 六十人です。





十人ずつ六つの組に分かれることになりました。わたくしは三組にはいりました。四年生から六年生までの友だちがばらばらになって、六つの組に分かれるのです。

受持の先生は、一組から三組までが倉田先生、四組から六組までが大下先生です。先生がたのほかには、保健婦さんも来ています。

はじめに倉田先生から、きょうから十日間の林間学校の生活について、いろいろ注意がありました。

それから、わたくしたちはよごれた顔や手をあらって、六つのへやにはいりました。そして、リュックサックに入れて持って来た着がえや学用品などを、戸だなの中にきちんと入

れました。

このように大ぜいの友だちといっしょに生活するのは、わたくしには、はじめてなので、なんだかとてもうれしい気がしました。

組長選挙

六つの組はべつべつになって、組長を選びました。選び方は、まず、組長になろうと思う人が、自分の名を言うのです。わたくしの

組では、六年生の中川さんと五年生の和田さんが、自分の名を言つて立ちました。四年生は小さいので、組長になろうとした人はひとりもありません。わたくしたちはふたりにへやから出てもらつて、みんなで組長を決めました。八人のうちふたりが和田さんを、あとの六人が中川さんをおしました。中川さんが組長に決まりました。これは投票でなく、手を上げて決めたのです。

中川さんは、

「ぼくは組長に選ばれたことをうれしく思います。組長をやつていくだけの力を、十分持つているとは思いませんが、きょうから十日間、全力をつくしてやつていこうと思いま

す。みんなもぼくに力を合わせてください。

と、元氣にあいさつをしました。

このようにして、ほかの組でも組長が決められました。

朝の運動

朝、六時半にかねが鳴ります。

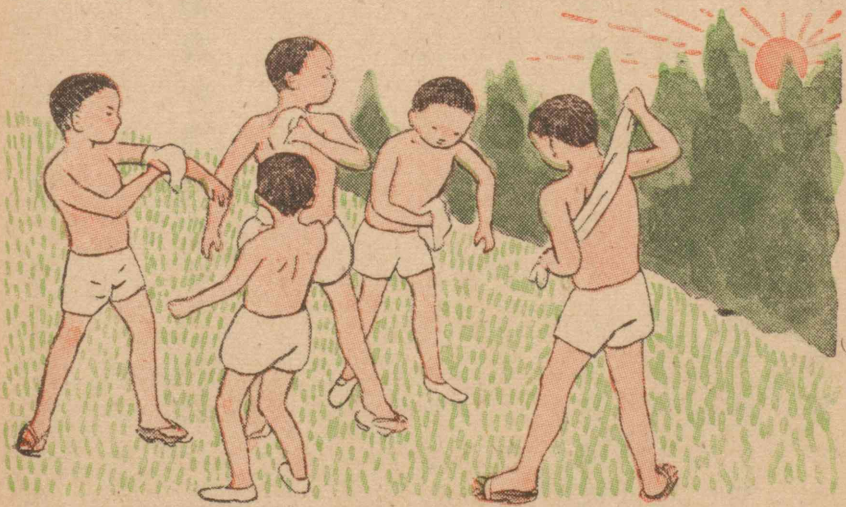
「みなさん、起きましよう。」

倉田先生が大きな声でおっしゃいます。わたくしたちは大いそぎで飛び起きて、表のしばふに走り出ます。

山の空気はひやひやとしていて、とてもよい気持です。すぎ林のすき間を、日光が白いすじになってさしています。



すみきった山の空気をむねいっ
ばいにすって、ここでわたくした
ちは、体そうやかんぶまさつをし
ます。それから、はをみがいて顔
をあらいます。朝ごはんまでの時
間を使って、へやの中のかたづけ
やしばふのそうじを、組ごとに分
かれてするのです。これは自分た
ちの住む所は、自分たちできれい
にかたづける習慣をつけるため
です。仕事はふたりずつ組になっ



します。わたくしは川原さんと組
んでいます。みんなが力を合わせ
ていっしょうけんめいになれば、
そうじはそうほねのおれること
はありません。かえって適当な運
動にもなつて、わたくしたちの
からだをじょうぶにします。

午前の課業

朝ごはんのあと、先生がたから
いろいろためになる話を聞きます。



リンカーンや、二宮金次郎や、ジェンナ
ーなどの、子供のころの話聞いて、わ
たくしたちも世の中のためになる、りっ
ぱな人になろうと思いました。

先生の話がすんでから、一時間ほど自
ゆうな時間があります。これは一日のう
ちでも楽しい時間です。わたくしたちは
そなえつけの本を読んだり、レコードを
聞いたり、きょう一日の計画を話し合っ
たりします。

午前の課業は九時から始まります。

きょうは保健婦さんから、手のあらい方とか、ほうたいの
仕方をならいました。手は指先を下の方に向けて水をかけ、
せっけんで二回あらいます。それからたっぷり水をかけて、
せっけんをよく落します。こうすると、とても手がきれいに
なります。ちよつとしたことですが、くふうするかしないか
で、たいへんちがうものだと思いました。

水泳

十日間のうちにならったことで、一番おもしろかったのは、
ずっと下の方の湖に水泳に行ったことです。水泳には三日も
行ったのです。この三日間のうちに、今まで少しも泳げなか

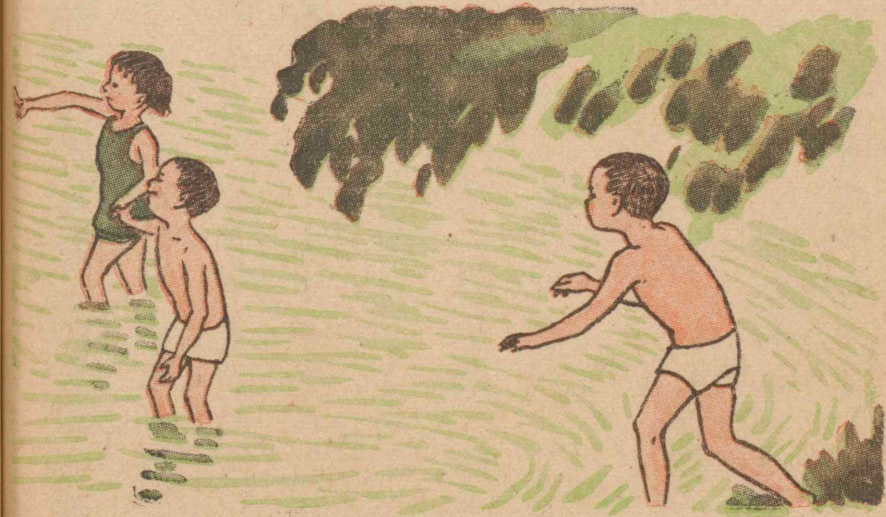
ったわたくしが、どうにか泳げるようになりました。

まず水泳用のパンツをはいて、みんなは水をあびることから練習を始めました。それから先生が、ひとりひとり目をどじて、息を止めて顔を水につけるのだと言われたので、わたくしはもうどうなることかと、むねがどきどきしました。間もなくわたくしの番がきて、先生が、

「さあ、思いきってやってごらん。」

と言われたので、わたくしは、顔を水につけようと思いましたがいざとなるとどうしてもおじけてしまいます。先生は、

「何もこわいことはないから、ちよつとでもつけてごらん。」とおっしゃって、わたくしのからだをかかえてくださいました。それでわたくしはひと思いに、



顔をつけてみました。先生はすぐわたくしのからだを起して、「りっぱにできましたね。」

とおっしゃったので、わたくしはうれしくなつてわらいました。

一度できると、それから、顔を水につけるのはなんでもありません。わたくしは平気でできるようになりました。こんどはうく練習です。これは思ったよりらくにできました。こばた足の練習もしました。わたくしは、なんでもやればできるものだ、という自しんがつかしました。

山登り

いよいよあすがさいごの日だというので、わたくしたちは山登りをすることにしました。

わたくしたちは、ぞう木の間を分けて登っていきました。

「あつ、くまのあしあとだ。」

と、和田さんが大きな声で言いました。わたくしはどきんとしました。みんなはすぐに、

「わあつ。」と言って、和田さんの指さしている所を見つめました。先生が、

「この足あとはいくまの足あとではな





ました。六十二のわができていました。あちらからもこちらからも小鳥のさえずりが聞えます。ちように上に登り着くと、遠くの山々まで見わたされました。たいへん天気がよかったので、南の方の太平洋まではっきり見えました。その日、山からおりて来た時は、もう七時を過ぎていました。西の山に太陽がしずんだところでした。空はまっかに夕やけして、あすも天気がよいと言っているような気がしました。

い。

とおっしゃったので、みんなは安心しました。

しばらく登ると、ちょうど切りたおした大きなすぎの木がありました。切口にいくつもわがはいつています。先生が、

「これは年りんというものだ。」

とおっしゃって、年りんの話をしてくださいました。木の大きさは、一年に一つずつこんなわをふやして、大きくなっていくのだそうです。わたくしたちはその木の年りんを数えてみ



(二) 進さんの日記

八月二日 (木) くもり

朝、六時ごろに目がさめたので、起きて

庭のそうじをした。大きな朝顔の花がきれいにさいていた。

青いのが三つ、赤いのが四つ、白いのが二つあった。

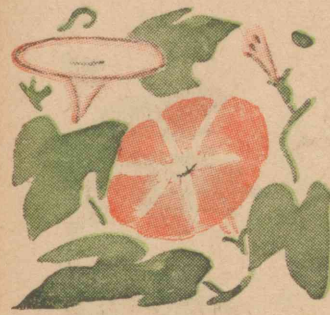
つぼみがたくさんついているから、これから毎朝さくこと

だろう。

昼ごはんを食べてから、となりの健作君

と、うらの小川で遊んだ。めだかをすくお

うと思つたが、めだかはとてもすばしく



で、なかなかあみにはいらぬ。

ふたりでやつと五ひきだけすく

つた。ガラスのあきびんに入れ

たら、きゆうにせまい所へおし

こまれて、まごまごしているよ

うに見えた。しばらくそうして

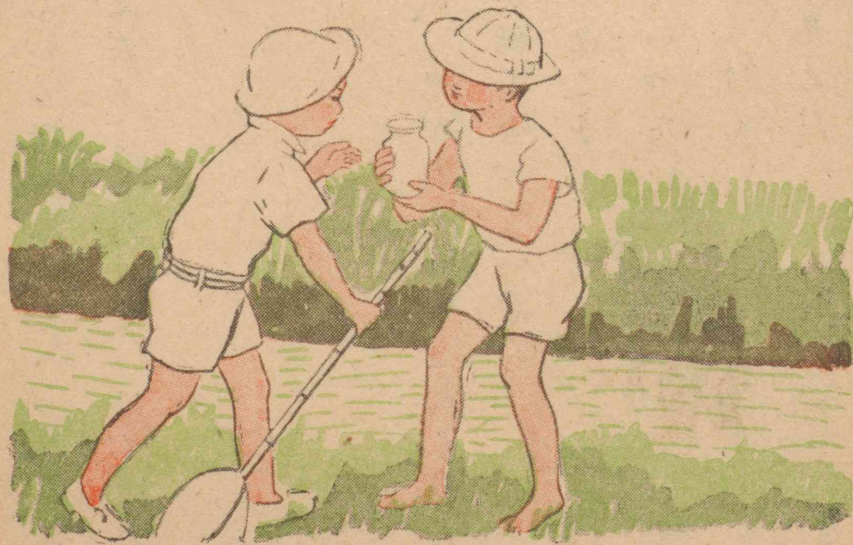
おいたが、かわいそうになつて、

健作君に、「にがしてやろうよ。」

と言つた。健作君も、「うん、か

わいそうだからね。」と言つたの

で、川ににがしてやつた。めだ



かは元気よく、なかまがたくさんいる所へ泳いでいった。きつとめだかもよろこんでいることだろうと思うと、ぼくはともうれしかった。

八月五日 (日) 晴

きょうもよい天気だ。ことしは、米がたくさんとれるだろうと、おじいさんとおとうさんが話し合っていた。

おかあさんの用事で、村役場の向こうのおばさんの家に、手紙を持っていった。道の両側のたんぼには、いっしょうけんめいに、田の草を取っている人が見えた。



みんな大きなかさをかぶっている。こしをのばした人の顔を見たら、健作君のねえさんだった。あついのにたいへんだろうと思った。これからぼくも、おとうさんやおかあさんのする時、お手つだいをしようと思った。

おばさんに手紙をわたしたら、「ご苦労さま」と言って、おいしいあめをくださった。おばさんが返事の手紙を書く間、雪子さんと遊んだ。手紙を受け取るといそいで帰った。

八月十日 (金) 晴

おとうさんとおかあさんは、ひるから弟をつれて、おばさんの家に出かけた。ぼくはにいさんとるす番をした。夕方、

ごはんがすんでから庭に出て、きのう、おとうさんが町から買って来てくださった花火をして遊んだ。

早く帰って来ると言ってお出かけたのに、おとうさんたちはなかなか帰ってこなかった。花火はなくなるし、心細くなつて、ぼんやり星を見ていたら、きゆうに、「おそくなつてすまなかつたね」と言うおかあさんの声が聞えた。ぼくは、びっくりしたのとうれしいのとで、「おかあさん」と、思わずなきそうな声を出してしまった。おかあさんは、「ふたりともよくるす番ができましたか。あまりおそかったから、さびしかったです。しょう。」とおっしゃった。

八月十六日 (木) 雨後晴

朝、目をさますと、ポツン、ポツンと雨だれの音が聞える。雨だなど思つてがっかりした。ごはんの時、「しばらくよい天気が続いたから、少しふつた方が、田や畑のためによいのだ」と、おとうさんがおっしゃった。

午後になつて雨があがった。ぼくはにいさんとうらの小川でふねをうかべて遊んだ。この間、にいさんと作ったほかけぶねだ。流れにそつとうかべると、ふねはほをふくらまして、ゆっくり川上へ動き出した。「ああ、走る、走る。」にいさんはうれしそうに大声を上げた。ぼくはふねとやらんで川岸を歩

いた。しばらくしてにいさんが、「おうい、進。ふねをあげて帰ってこい。」と言ったので、ふりかえると、にいさんはずうつと川下の方にいた。

ぼくはふねを取り上げようとして、手をのびしたら、つるりとすべってころんでしまった。

きょうはおもしろい一日だった。



八 むかし話

(一) きつちよむさん

馬をあわれむ

きつちよむさんは馬をひいて、山へたきぎを取りに行きました。

その日は、思いのほかたくさんたきぎが取れましたので、きつちよむさんはぼくぼくしながら、それをみんな馬のせなかへつみ上げました。そこで、やせ馬は地面をはいずるようになかったら、よたよたと山を下って行きました。とちゅう



まで来て、ようやくそれに気が
ついたきつちよむさんは、

「これはわたしがわるかった。
こんなにくさん荷をつけて、
さぞ重かったらう。だが、も
う安心しろよ。わたしが手伝
つて、しよつて行つてやるか
らな。」

と言つて、馬のせなかからたき
ぎを二わばかりおろしてやり、
それを、うんとこしよと自分で

しよいました。しよして、きつちよむさんはすまして、その
まま自分も馬にまたがり、あせをかきかき山を下つていきま
した。

ないしよ話

きつちよむさんがせつせと畑を耕していました。通りかか
つた村のわかい者が、

「何をしているのですか。きつちよむさん。」

と、声をかけましたが、返事がありません。

「おうい、きつちよむさん、何をしているのですか。」

と、もう一度、わかい者が大きな声で言いました。きつちよ

むさんは、そつとこしをのばして、口に手をあてて言いました。
 「しいつ、そんなに大きな声を出すな。聞きたければこつちへよつてきてくれ。ないしよ、ないしよだ。」
 わかい者は何ごとかと思つて、そつと近づいていくと、きつちよむさんはわかい者の耳に口を当てて、こつそりと、
 「実は、まめをまくのだ。」



と言いました。

わかい者は、

「なあんだ、きつちよむさん、まめぐらいのことで……。」

と言いかけるのを、きつちよむさんは両手でおさえて言いました。

「それ、声が高い。うっかりして、はとやかからずに聞かれてごらん。せつかくまいた畑のまめも、たちまちほじくられてしまうではないか。」



れんこんの話

きつちよむさんは、ある時ごちそうによばれました。

おぜんの上のごちそうを、むしゃむしゃ食べていくうちに、

れんこんを一きれつまみ上げて、いかにも感心したらしく、

「このだいこんのあなたは、よく

もこんなにきょうにあけたも

のだ。こんな料理は、よっぱ

どうでがなくてはできるもの

ではない。

と、ひとりごとを言っています。



それを聞いたとなりの人は、さ
てはきつちよむさんは、れんこ
んを見るのははじめてだなと思
って、小さな声で、

「ばかなことを言うどわらわれ

るぞ。これはだいこんではない。れんこんだ。」

と教えてやりました。すると、きつちよむさんは大ききうな

ずき、ますます声を大きくして言いました。

「このれんこんのあなたは、よくもこんなにきょうにあけたも

のだ。こんな料理は、よっぱどうでがよくなくてはできる

ものではない。」



(二) 一本のわら

これは古いむかしのお話です。

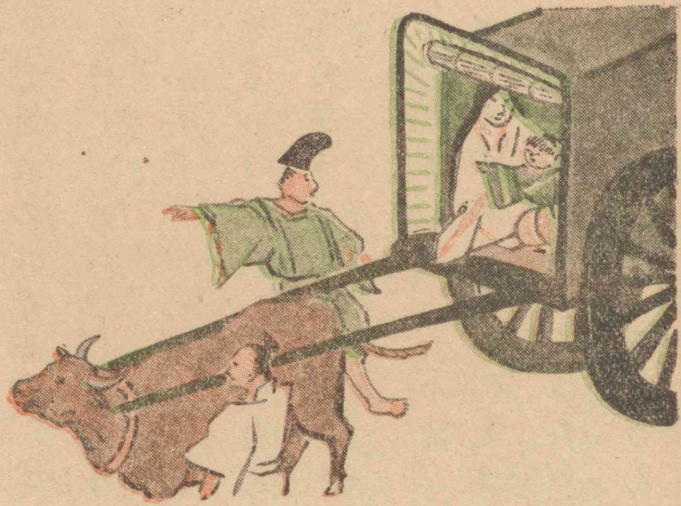
京都の近くに、正作さんという、びんぼうではありましたが、たいへん心のやさしい、しょうじきな人がいました。正作さんはいつも楽しそうに、いっしょうけんめいに働いていました。



ろう。と、その一本のわらを大切に持って、また歩き始めました。

あるあたたかな春の日のことでした。用たしに出かけた帰り道で、正作さんはどうしたはずみか、石につまずいてころんでしまいました。やれやれと起き上がって気がついてみますと、知らぬ間に、一本のわらを手につかんでいました。「おや、こんなものがあつた。すてるのももつたいない。持って帰

とちゅうで、一びきのあぶが、
 飛んで来ました。顔のあたりをう
 るさく飛び回ります。木の小えだ
 を折って、追いはらいました。が、
 すぐにまた飛んで来ます。あまり
 うるさいので、そのあぶをつかま
 えて、持っていたわらでしぱり、
 小えだに結びつけました。あぶは
 しばられたまま、ぶんぶんとえだ
 の先を飛んでいます。それを手に持ったまま、
 正作さんは道
 を歩き続けました。



さんはお供の者に、あぶをもらって来るように言いつけまし
 た。

すると、向こうの方から、りっ
 ぽな車が来ました。大勢のお供が
 ついています。車には、五つばか
 りの男の子が、おかあさんといっ
 しょに乗っていました。男の子は
 車の中から外を見ていましたが、
 正作さんの手に持っているあぶを
 見て、「あのあぶがほしいなあ」と
 だだをこねました。そこでおかあ

お供の者は、正作さんのところへやって来て、

「ご主人のお子様が、そのあぶをほしいとおっしゃるのですが、いただけないでしょうか。」

と言いました。正作さんは、

「お安いご用です。さあさあ、お持ちなさい。」

と、そのあぶをわたしました。男の子のおかあさんはたいそう喜んで、お礼に、おいしそうなみかんを三つ、正作さんにくれました。



男の子は大喜びです。正作さんも、おいしそうなみかんを三つももらったものですから、たいそう喜んで、そのみかんをだいに持って、また歩き続けました。

しばらく行くと、道ばたに、女の人が、うつぶせになっていました。顔の色が真っさおで、ひたいにはあせさえにじんんでいます。つれの人たちはどうしたらよからうかと、うろうろしていました。





女の入は、おいしそうにみかんを食べました。そしてお礼に、りっぱな布を二反、正作さんにくれました。

「どうなさったのですか。たいへんお苦しいようですが……」
正作さんは親切にたずねました。
「はい。急病でこまっています。水でもあげたらと思うのですが、その水が見当たらないのです。と、つれの人が答えました。

「それでは、このみかんをあげてごらんなさい。」



「いただきます。どうしたことが、おぼつたりたおれてしまいました。」

正作さんは、女の人がみかんを食べて元気になったようすを見て、たいへんうれしくなりました。そして、お礼にもらった反物をだいにいかかえて、また歩き続けました。すると、向こうから、りっぱな馬に乗った人が、お供をつれて急いでやって来ました。よい馬だなあと、正作さんは思わずみとれ

馬に乗っていた人は、たいへんこまったようすでした。しかし、よほど急ぐ旅と見えて、あどのことをお供の人にまかせて、自分は大急ぎで歩いて行きました。

たおれた馬はまるで死んだようです。お供の人がこまっているのを見て、正作さんは気の毒に思い、布を一反あげますから、このたおれた馬をください。と言いました。お供の人は大喜びで、布をもらって主人のあとを追って行きました。



正作さんは、たおれた馬がかわいそうでなりません。もしかしたらまた元気になりはしないかと思つて、ねっしんにいろいろ手当をしてやりました。すると、馬は今までとじていた目をあけて、少しからだを動かしました。正作さんはうれしくなつて、いっそうねっしんに手当を続けました。

馬は急に立ち上がりました。そうして、歩き始めたではありませんか。正作さんの喜びはたいへんなものです。





人が馬を見て、「これはよい馬だ。いま、馬をほしいと思っ
いたところだが、ゆずってくれませんか。」と言いました。

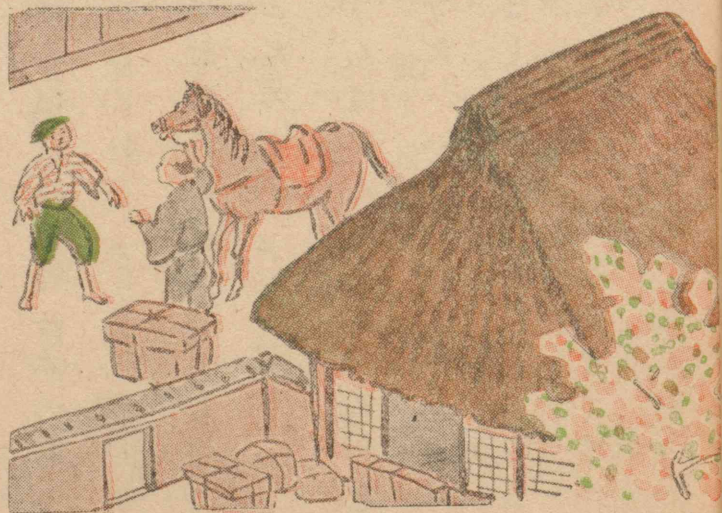
正作さんは、

「どうぞお使いください。」

と、親切に答えました。

そうすると、この家の主人は、

「自分はひっこして行くのですか
ら、この近くにある田がいらなく
なります。馬の代わりに取ってく
ださい。それから、この家は自分
たちがひっこして行くと、住む者
がなくなるのですから、あなたが住んでください。」と言いま



言いま

追 (134)	指 (111)	建 (103)	験 (90)	秒 (83)	寺 (68)	久 (57)	加 (42)	庭 (38)	困 (21)	顔 (5)
結 (134)	練 (112)	倉 (104)	畑 (91)	真 (84)	冷 (68)	誠 (57)	転 (44)	機 (38)	回 (23)	残 (6)
勢 (135)	記 (118)	保 (104)	照 (92)	船 (85)	弁 (70)	周 (57)	任 (44)	械 (38)	曜 (24)	限 (6)
主 (136)	君 (118)	健 (104)	飯 (94)	確 (85)	当 (70)	薬 (58)	表 (47)	卒 (39)	週 (24)	芽 (6)
様 (136)	返 (121)	婦 (104)	妹 (94)	便 (86)	浅 (71)	順 (59)	母 (48)	業 (39)	徒 (25)	息 (6)
喜 (136)	星 (122)	選 (105)	令 (94)	利 (86)	貝 (72)	善 (59)	弟 (48)	不 (41)	教 (26)	鳴 (8)
礼 (136)	荷 (126)	拳 (105)	肥 (94)	改 (86)	登 (73)	受 (62)	市 (49)	体 (41)	討 (30)	隊 (10)
急 (138)	伝 (126)	票 (106)	養 (95)	良 (86)	種 (73)	開 (62)	菜 (51)	以 (41)	論 (30)	育 (10)
布 (138)	耕 (127)	習 (108)	漢 (98)	量 (87)	辺 (76)	画 (62)	黄 (52)	治 (41)	昨 (32)	起 (11)
反 (138)	感 (130)	慣 (108)	姉 (98)	院 (88)	計 (78)	鼻 (63)	世 (54)	予 (42)	駅 (34)	案 (17)
毒 (140)	理 (130)	適 (109)	細 (98)	参 (88)	角 (80)	然 (67)	界 (54)	定 (42)	童 (36)	別 (17)
	働 (132)	課 (109)	横 (102)	拝 (88)	末 (81)	遊 (67)	第 (54)	交 (42)	舎 (37)	退 (19)
	折 (134)	宮 (110)	活 (103)	堂 (88)	字 (81)	銀 (67)	談 (54)	代 (42)	鉄 (37)	労 (21)



正作さんは、思いがけない話に
 びっくりしてしまいました。
 正作さんは、たった一本のわら
 を拾ったことから、こうして、り
 っぱな家に住み、広い田を耕すこ
 とになったのです。
 正作さんはびんぼうだった時と
 同じように、いっしょうけんめい
 に働きましたので、だんだんくら
 しが楽になったということです。

勉強の手引

一 春

(一) 春は花になつて

- (1) この歌をいくども読んでみましょう。
- (2) 春にはどんな花がさくでしょうか。ちようめんに書いてみましょう。
- (3) 春になると、どんな小鳥がなきはじめますか。ちようめんに書いてみましょう。
- (4) 次のことばを使って、短い文を書いてみましょう。

○色どる

○陽気な

(二) 春のおどすれ

- (1) げきに出てくる動物の名をちようめんに書きましよう。
- (2) 春のめがみが来てなぜみんながよろこんだ

みんなて話し合つてみましょう。

- (2) この小学校の生徒たちは何年かかつて運動場をひろげましたか。

- (3) ひどい方言を使うのはどうしてわるいのでしょうか。みんなて話し合つてみましょう。
- (4) あなたの地方でひどい方言と思われるものをしらべて、ちようめんに書いてみましょう。
- (5) 次のことばを使って、短い文を書いてみましょう。

○……したり……したりして

- (6) 「わたくしの学校」というたいて作文を書きましよう。

三 楽しい家庭

(一) 母の日

- (1) 母の日というのはいつですか。母の日はどういうことをする日ですか。ちようめんに書

か、そのわけを考えて話し合つてみましょう。

- (3) みんなで、このげきをしてみましょう。

二 明かるい学校

(一) 先生のおみやげ

- (1) この文しようを読んで、おもしろいと思つたところをみんなて話し合つてみましょう。
- (2) この文しように出てくる生徒たちはよい生徒でしょうか。よい生徒と思つたら、そのわけをちようめんに書いてみましょう。
- (3) 青木先生は、出かける前にどういうことが心配だったのでしよう。

- (4) あなたも受持の先生に手紙を書きましよう。

(二) こころいう友だちがいる

- (1) この文しようを読んでかんしんしたことを書いてみましょう。
- (2) 書き方のけいこをしましよう。

○日曜日 ○旅行 ○相談

- (3) 次のことばをぜんぶ使つて、一つのもとまった文を作つてみましょう。

○言われるとおりに ○ふいたりしました

○野菜を ○まさおちゃんは

○ねえさんに ○おさらを

○あらつたり ○わたくしと

(二) しゃしんちよう

- (1) 誠一にいさんはどこへ帰るのですか。ちようめんに書いてみましょう。
- (2) 周ちゃんたちの家の人の名まえをみんなちようめんに書いてみましょう。
- (3) 誠一にいさんは周ちゃんたちのおくりものをたいへんよろこびましたね。なぜよろこん

だのでしよう。

- (4) あなたも、家じゅうの人のしゃんちょうを作ってみましょう。名まえと年もわすれずに書きましょう。

四 自然とともに

(一) 川原遊び

- (1) 川の水のきれいなことを、どう書いてあるか、ちようめんに書きぬいてみましょう。
- (2) 次の文は、どんなようすを書いた文でしようか。

○川の水が銀のうろこのように光る。

○一足一足、おそろおそろ歩く。

- (3) 駅から川原まで、どんな所を歩いたか、地図のようにかいてみましょう。

(二) 山の少年のたより

- (1) 山のちよう上で何をしたと書いてあります

か。ちようめんに書きぬいてみましょう。

- (2) 牧場というのはどういうところでしょうか。この文しよをよく読んでちようめんに書いてみましょう。

(3) 字のれんしゆうをしましょう。

○牧舎 ○高山植物 ○山登り ○手紙

(4) 次の文のあやまりをなおしましょう。

○馬や牛がむれに作って、草食べています。

○まどの近くを、うぐひすが来て鳴いています。

(5) あなたの住んでいる土地のようすを作文に書いてみましょう。

五 時計

(一) 古い時計

- (1) 古い柱時計はだれが買ってくださったのでしようか。

- (2) 古い柱時計はいろいろの音に聞えますね。どんな音に聞えるのでしようか。

(3) 古い柱時計と函館のおじいさんと、にているところをちようめんに書きましょう。

- (4) この文しよを読んでどんなかんじがしましたか。みんなで話し合ってみましょう。

(二) いろいろな時計

- (1) 時計を計るのにどんな時計が用いられましたか。

(2) 日時計と水時計とすな時計と、この三つをくらべてみて、それぞれの便利な点をみんなて話し合ってみましょう。

- (3) ふりこのりくつを発見したガリレオは、どんなことからそれを発見したのでしようか。本を見ないでちようめんに書いてみましょう。

- (4) 時のきねん日は何月何日ですか。

- (5) 次のことばを使って、短い文を作ってみましょう。

○しじゆう ○かんとんに ○なんの気なしに ○さつそく ○おう用して ○正確な

六 注意して見よう

(一) かわったじゃがいも

- (1) 洋一さんがはじめふしぎに思った時のじゃがいものようすを、ちようめんに書いてみましょう。

(2) 洋一さんはたいへんうれしい気持ちになりましたね。なぜでしょうか。

- (3) 洋一さんはかわったじゃがいものありさまをよくしらべて、まとめてちようめんに書いています。あなたもちようめんにうつしてみましょう。

(二) 漢字の話

(1) 国語の本の終りには、大てい漢字の表がつ

いています。できるだけたくさん表を見て、次のように分けて書いてみましょう。

○ごんべんの字

○きへんの字

○てへんの字

○くさかんむりの字

○しんにゆうの字

(2) そのほか、おたがいにによつた形を持つてゐる字をさがしてみましょう。

(3) 次の漢字をれんしゅうしましょう。

○顔 ○葉 ○夕飯 ○肥料 ○発明 ○注

意 ○頭 ○交通 ○進歩

(4) かわつたじゃがいもや漢字の話のように、いろいろしらべて気がついたことがあるでしょう。しらべて気がついたことを作文に書き

ましよう。

七 夏の生活

(一) 林間学校

(1) 林間学校のようにすをまとめてみましょう。

○建物のある所 ○建物の大きさ

○林間学校の生徒の数 ○組の数と組の人数

○林間学校にゐる日数

(2) この文しよをよく読んで、次のこの順じよがどうなつてゐるかを考へて、1 2 3 の数字を()の中に入れましょう。

() はをみがいて顔をあらう。

() ねどこから起きる。

() 午前の課業

() へやの中のかたづけやしはふのそうじをする。

() 朝ごはんを食べる。

() 体そうやかんがまさをする。

() 先生の話

() 自ゆうな時間

(3) 林間学校の生活でかんしんしたことをみんなて話し合ひましょう。

(4) あなたは山登りや水泳をしたことがあるでしょうね。山登りと水泳とどちらがすきですか。すきな方を作文に書いてみましょう。

(二) 進さんの日記

(1) 次の文のちがうところをみんなて考へて話し合つてみましょう。

○ことは米がたくさんどれるだらう。

○ことしも米がたくさんどれるだらう。

(2) 進さんの日記から八月二日、五日、十日、十六日の四日分だけ出しておきました。進さんは二日の日記にどんなことを書いています

八 むかし話

(一) きつちよむさんの話

か。なるべくかんたんにまとめてちようめんに書いてみましょう。それから、五日、十日、十六日の分も書いてみましょう。

(3) 日記はその日のうちのできごとをみんな書くのではありませんね。だいいじなことを書くのです。あなたも進さんの日記を手本として夏休みの日記をつけてみましょう。

(1) きつちよむさんは馬からたきぎを二わおろしてやりましたね。そうして自分でしよつて馬に乗りましたね。さて、馬は荷物がかかるようになったでしょうか。それとも重くなつたでしょうか。

(2) きつちよむさんは、はどやからすに聞かれないようにこつそり言いましたね。さて、は

とやからすにまめをまいたのを知られずすむてしょうか。

(3) れんこんのあなはひとりてにできてゐるもので、わざわざあげたものではありませんね、いったい、きつちよむさんはれんこんを見たことがあるのでしょうか。

(4) 「きつちよむさんの話」を読んで、どんなところがおもしろかったか、みんなて話し合つてみましょう。

(5) 次のことばを使って、短い文を書いてみましょう。

○ぼくぼくしながら ○せっせと

○よくもこんなに ○さては

(二) 一本のわら

(1) この文しやうをよく読んで、次に書いてあるように、二ページずつ、そこに書いてある

ことをかんたんにまとめて、ちやうめんに書いてみましょう。

(百三十二ページ) むかし正作さんという人がいました。

(百三十三ページ) 正作さんは歩いてゐるとちゆう、ころんだ時に一本のわらをつかみました。

(百三十四ページ) あぶが飛んできたのでつかまえてわらに結びました。

(2) 「一本のわら」の話を、みんなの前でかんたんに話してみましょう。

(3) 正作さんはどんな心を持った人てしょうか。みんなて話し合つてみましょう。

(4) あなたの知っている話を紙しばいに書いてみましょう。

編集にたずさわった人

監修者 学士院会員 柳田国男
芸術院会員 岩井良雄
編集委員 東京教育大学教授 岩淵悦太郎

国立国語研究所員 大藤時彦
民俗学研究所理事 上飯塚好実
東京杉並第四小学校校長 鳥山榛名
山梨大学教授 橋本芳一郎
東京学芸大学助教授 望月久貴
東京学芸大学助教授 齋藤長三

さしえ及び装てい

齋藤長三

新しい国語 四年上

(小) 第四学期用 (校) 小国四一五

昭和二十六年五月一日 印刷
昭和二十六年六月一日 発行
(昭和二十五年八月十二日 文部省検定済)

定価 円

Approved by Ministry of Education (Date)

著作者 東京書籍株式会社編集部
代表者 藤田貞次

発行者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者 山田三郎太

印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者 山田三郎太

発行所 東京書籍株式会社

(出版権の設定登録及び表紙の意匠、装てい登録中)



広島大学図書

0130449759



東京書籍株式会社

文庫

50

759